

令和5年度 前沢明峰支援学校 全体研究（中間まとめ）

I 研究テーマ

「生涯にわたって学び、成長しようとする力を高める授業実践・指導実践」（2年次研究）

II 研究テーマ設定の理由

1 学校教育法、学習指導要領、学校教育目標から

学校教育法第30条第2項では、教育の実施に当たって、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と規定されている。特別支援学校学習指導要領解説（総則編）においても、「生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積も生かしながら、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要」としている。

また、学校教育目標では「児童生徒一人ひとりが個性と能力を発揮し、可能性を最大限に高め、自立的・主体的な生活を送る」とある。ここで掲げられている「生活」とは、今現在の学校生活を充実させながら、現在から卒業後にかけての家庭生活や社会生活を含め、生涯にわたって自立的・主体的な生活を目指すものであると考えた。

2 これまでの研究から

昨年度までの校内研究（以下、前次研究）においては、研究テーマ「児童生徒の自立的・主体的な生活につながる授業実践・指導実践」について考え、取り組みを重ねてきた。各学部、寄宿舎において授業づくりシートや生活指導計画組み立てシートを活用しながら授業検討や指導実践の検討を重ね、自立的・主体的な生活についての知見を深めることができた。

前次研究において、以下に挙げる成果と課題が明らかになった。

（1）成果

①授業改善の取組について

小学部：自立活動の指導が様々な教科の力を支えるという意識のもと、自立活動の視点を踏まえた授業づくりを行うことで主体的に学ぶ児童の姿を引き出すことができた。

中学部：対象として抽出した10名の生徒への支援の手立ての実施により、多くの成果や新たな成果や課題を明確にすることができた。

高等部：作業班の指導者が共通した観点で生徒の指導を繰り返したことにより、生徒の主体性や自信につながった。

など、授業改善の取組の成果が報告された。本研究においても、研究テーマに沿って授業改善に向けた継続的な取り組みが必要であると考えた。

②授業づくりシート等の活用について

各学部でそれぞれに運用しやすい様式を検討してきた授業づくりシートについては、

小学部：単元計画シートを作成した。シートの使い方に慣れ、学部研究会の協議においても、教科や自立活動のねらいを**共通理解するツール**として有効に活用できた。

中学部：単元計画シートと授業記録シートを作成した。様式の中に「本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容」の欄を追加したことにより、**担当者間での共通理解**につながり、より各教科等との関連を意識することにつながった。

高等部：授業記録シートを作成した。学部研究会でのワークショップにより、シートを通して生徒の実態について**情報交換**をしたり、**課題や目標を共有**したりすることができた。

ことなどが報告された。

また、寄宿舎においてはこれまで作成してきた「実態記録シート」に加え、新たに「生活指導計画組み立てシート」を作成し、寄宿舎生の実態や取り巻く環境について整理することで**指導の手立てを導き出しやすかった、指導員間での共有**がしやすかったこと等が報告された。

本研究においても、必要な情報の整理、職員間の共通理解や情報共有に資する授業づくりシート等の改善、活用は引き続き有効であると考ええる。

③今後の実践につながる各学部での取組について

小学部：学部研究会における授業実践発表を通して、普段は見る機会の少ない他学級の児童の実態や教科及び自立活動の指導の実態を共有できたこと、グループ協議を通して得られた授業改善のアイデアは他学級でもすぐに生かすことができることが多く、職員の支援の質を高めることにつながったこと、「児童が主体的に学ぶ姿」を引き出すことができた要因を学部職員で話し合い、整理してまとめることができたこと等が報告された。

中学部：実践を通して新たな課題が挙げられ、学部研究会のグループワークの中でそれらの課題の改善策について意見交換を行うことができ、今後の実践において「より具体的な支援の手立てにつながっていく」と考えられること等が報告された。

高等部：作業学習における「育成を目指す資質・能力」について共通理解することで単元や個人の目標設定が具体的になり、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の三つの観点に沿って目標設定ができ、目指す方向性が一致したことで統一された指導につながったこと等が報告された。

(2) 課題

①授業づくりシート等（単元計画シート、授業記録シート）について

各学部で様式を作成して運用している授業づくりシートについては、

小学部：「実践を終えての評価を確実に実施し、授業改善の手がかりとして活用していけるような仕組みづくりが必要」であること。

中学部：2種類のシートをより活用しやすい形にするための工夫が必要であり、改善のアイデアが提案されるとともに、次年度以降の実践の中でよりよい形を検討していくことが必要であること。

高等部：授業記録シートが日常的に活用され、次の授業、次の単元へとつなげていくことで最大の効果が得られるものであると考えることから、生徒の実態や活動内容等を、日常的に記録できるようなシートの活用方法を考えていくこと。

の必要性が報告された。

また、寄宿舎では指導員の「観点別学習評価についての理解が不足している」「(観点別学習評価についての) 学習の機会を設ける必要がある」などの反省が報告され、指導員の研修の必要性と、より「日常的に使用できる実践的な様式の検討」や「評価方法のマニュアル化」の必要性などが課題として報告された。

②今年度以降の授業実践・指導実践に関わって

各学部の実情により、今年度以降の実践に関わる課題も報告されている。

小学部：各教科における一斉指導形式での授業づくりに力を入れてきたが、この指導形態の効果については今後も検証するとともに、**より効果的な指導形態の在り方を模索**していく必要があることが報告された。

中学部：作業学習の実施方法について、令和4年度から始めた通年方式がよいという一応の結果は出されているが、よりよい実施方法については継続して検討していく必要があることと、「各教科等を合わせた指導」の目標設定に関わって各教科との関連を意識することができたが、評価においても、その授業(単元)における成果や課題が、各教科等の目標・内容のどの部分に関連し、どの部分で成果が上がったのかが**分かりやすい様式や記述の仕方について検討**する必要があることも報告された。

高等部：高等部作業学習における「育成を目指す資質・能力」について一定の成果をあげることができたが、まだ定着には至っておらず、目標設定や評価の視点に活用できなかったという意見も出されており、次年度以降も目標設定、評価について「**育成を目指す資質・能力**」の観点の活用が必要であることが報告された。

また、寄宿舎では研究に関わって「通常以上に棟会に時間を費やしている」ことや「もっと掘り下げて指導にあたる時間が欲しかった」などの反省が出され、より効率的な研究実践、指導実践の必要性が報告された。

以上、前次研究における各学部・寄宿舎での授業実践・指導実践の成果と課題を記述した。本研究においても、前次研究での授業実践・指導実践を通して培われた知見と、挙げられた課題とを十分に生かしながら、授業改善の取り組みを通して本研究テーマについて深く考えていく必要性は高いと考える。

(3) 校内研究にかかわる職員アンケートから

本次研究の構想にあたり、令和4年度末に本校職員を対象とした校内研究にかかわるアンケートを実施した。この中の「研究内容について」の質問ではいくつかのキーワードを提示し、その中から研究内容として取り上げてほしいもの選択(複数回答可)する形での回答を求めた。結果を【表1】に示す。

【表 1】研究内容に関する職員アンケート結果上位（複数回答可、66 名回答）

授業実践	自立活動	教科指導	教科等を合わせた指導	日常生活の指導
27 名 (40.9%)	24 名 (36.3%)	21 名 (31.8%)	21 名 (31.8%)	13 名 (19.6%)
ICT 教育	生活単元学習	主体性	ソーシャルスキル	観点別評価
13 名 (19.6%)	13 名 (19.6%)	11 名 (7.7%)	10 名 (7.7%)	9 名 (5.6%)

ここから、多くの教職員が校内研究として「授業実践」を取り上げたいと考えていることが分かる。また、前次研究で取り上げた「自立活動」「教科指導」「各教科等を合わせた指導」についても、引き続き関心の高いテーマであることが窺える。

以上に挙げた研究テーマ設定の理由を踏まえながら、今年度の研究テーマ「生涯にわたって学び、成長しようとする力を高める授業実践・指導実践」について深めていきたい。

Ⅲ 研究内容

- 1 研究の基本構想と共通理解
- 2 全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舎の研究計画の作成と推進
- 3 授業実践と PDCA サイクルによる授業改善の取組
- 4 研究のまとめ

Ⅳ 研究組織

1 研究組織

以下の研究会等については、校長、副校長以下、直接児童生徒とかかわる職員全員の参加を基本とする。（令和 2 年度年度末反省会で確認）

（1）全体研究会 第 1 回：5 月 26 日 第 2 回：2 月 22 日

- ①全体研究の内容、計画、まとめなどについて協議し、その内容を共有する場とする。
- ②各学部、寄宿舎の研究について意見交換を行い、研究内容の充実を図り、共通理解を進める。

（2）学部研究会（毎月）、寄宿舎研究会（年 8 回）

各学部、寄宿舎の研究を推進する。詳細は各学部、寄宿舎の計画による。

（3）授業研究会（年 3 回 7 月：中、9 月：小、11 月：高）

- ・各学部の研究に基づく提案授業により、全校での授業研究会を行い、研究内容や推進状況について協議を行う。授業研究会ごとに協議の主要テーマとなる「協議の柱」を設定し、協議の柱

を中心としながら意見交換を行う。各学部の児童生徒の実態について共通理解を深める場としても活用する。

- ・研究協議は小グループによるワークショップ型を基本とするが、授業内容や授業者の希望等を受けて柔軟に対応する。
- ・研究会終了後に参加者へのアンケートを実施し、その内容をまとめたものを研究会の記録と合わせ職員に周知し、研究推進に役立てる。

V 研究計画

本次研究は令和5～6年度の2年次研究とし、年度末にそれぞれの年度の研究のまとめを行う。令和6年度末に研究集録（明峰の実践第21号）を発行する。研究計画を【表2】に示す。

【表2】研究計画

1年次（令和5年度）の研究計画	2年次（令和6年度）の研究計画
1 全体研究テーマ、研究の構想の提案	1 2年次の研究計画の見直し
2 各学部研究、寄宿舍研究の内容、計画の立案	2 授業実践、指導実践
3 授業実践、指導実践	3 授業研究会（年3回）
4 授業研究会（年3回）	4 講演会の実施
5 講演会の実施	5 研究のまとめ
6 1年次の研究のまとめ（中間まとめ）	6 研究集録の作成

VI 研究推進にあたって

1 学校教育法、学習指導要領等から

（1）資質・能力の三つの柱から見た、全体研究テーマについて

学校教育法第30条第2項は、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と規定している。特別支援学校学習指導要領（総則編）ではこの規定を受け、「生きる力」の重要な要素の一つである「確かな学力」を育むために、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること」と書かれている。そして、「生きる力」をより具体化し、育成を目指す資質・能力を、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理し、バランスよく育成することを示した。このことから、これまでの研究においても重視されてきた資質・能力の三つの柱を大切に育成し、評価するという観点は引き続き重要になる。

その中でも、本研究テーマである「生涯にわたって学び、成長しようとする力を高める授業実践・指導実践」にせまる上では、三つの柱の一つである「学びに向かう力、人間性等」が深く関わってくると

考える。学校卒業後も生涯にわたって学ぶ意欲を失わずにもち続け、更なる成長を目指していく上では、日々の授業において学びに向かう力や人間性を高めていくことが何よりも必要であると考えためである。

「学びに向かう力、人間性等」は、観点別評価(学習状況を分析的に捉える)を通じて見取ることができる「主体的に学習に取り組む態度」の部分と、観点別学習状況の評価や評定には示しきれない児童生徒の一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する「感性、思いやり」の部分に分けられる。中でも、「主体的に学習に取り組む態度」を評価するにあたっては、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の二つから行うことが求められる（文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター、2019）。仮説として、上記の側面を意識しながら授業実践、指導実践において目標を設定し、評価をすることを通して主体的に学習に取り組む態度または感性、思いやりが育まれることにより、おのずと「生涯にわたって学び、成長しようとする力」の育成にもつながってくるのではないかと考える。

つまり、「生涯にわたって学び、成長しようとする力」がある状態とは、「粘り強い取組を行おうとする側面と、自らの学習を調整しようとする側面から見た『主体的に学習に取り組む態度』が育まれている状態」と言い換えることができると考える。

以上のことから、「生涯にわたって学び、成長しようとする力」を、「粘り強い取組を行おうとする側面と、自らの学習を調整しようとする側面から見た主体的に学習に取り組む態度」と定義する。宮城県総合教育センター（2021）は、教科別の指導の評価規準「主体的に学習に取り組む態度の具体」と各教科等を合わせた指導の目標「児童生徒に身に付けてほしい『学びに向かう力、人間性等』」を設定するときに押さえない「粘り強さ」「学習の調整」について、以下の表記例をまとめている。

【表3】「主体的に学習に取り組む態度の具体」と「児童生徒に身に付けてほしい『学びに向かう力、人間性等』」の表記例

【粘り強さ】 思いや願いの実現 に向かおうとして いること	<ul style="list-style-type: none"> ・二度、三度と繰り返して ・粘り強く繰り返して ・見通しを持って ・目標に向かって ・手順どおりに行って ・計画を確実に行って ・進んで ・友達のしている方に視線を向けて ・進んで取り組んで ・体で表して ・考えをはっきりと伝えて ・教師と関わりながら ・友達と関わりながら ・様々な人と関わりながら ・自分のよさを生かして
【学習の調整】 状況に応じて自ら 働きかけようとし ていること	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちを落ち着けて ・教師の話を聞いて ・自分と友達それぞれのよさを生かして ・友達の話を聞いて ・友達の思いを理解して ・友達の考えを理解して ・教師の支援を受け入れて ・友達の考えを受け入れて ・友達と協力して ・相手の立場を知って ・自分の考えと友達の考えのよさを生かして ・手本を模倣して ・教師のやり方を模倣して ・友達のやり方を模倣して ・違った考えを参考にして ・新しいことに挑戦して ・自分で考えたことを活用して

宮城県総合教育センター（2021）：「知的障害教育のためのみやぎ授業づくりガイド」より引用

（２）主体的・対話的で深い学び

特別支援学校学習指導要領解説（総則編）において、「子供たちが、（中略）生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践にみられる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。」とある。

「主体的・対話的で深い学び」は新学習指導要領において「授業改善の取組を活性化していく視点として」位置づけられたもので、新井（2019）はこれらを【表４】のようにまとめている。以下の視点に沿った授業改善を今後も引き続き行っていく。

【表４】「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」

主体的な学び	学ぶことの興味や関心／自己のキャリア形成との関連付け、粘り強い取り組み／学習活動の振り返り、次につながる学び
対話的な学び	子供同士の共同／教師や地域の人との対話／先哲の考えをもとに考える
深い学び	習得・活用・探究という学びの過程／知識を相互に関連付ける／情報の精査と考えの形成、思いや考えを基に創造する

新井英靖（2019）：「特別支援学校新学習指導要領を読み解く「各教科」「自立活動」の授業づくり」より引用

２ これまでの全体研究会の助言の内容から

令和元年度の第２回全体研究会において、岩手県立総合教育センターの阿部真弓先生から「研究会の資料の中で『学校教育法が定める学校教育の３要素』『新学習指導要領で示された育成すべき資質・能力の三つの柱・３観点』『観点別学習状況の評価の３観点』の３つが混同されているところがあるので整理と理解が必要である」とご指導いただいた。【表５】にまとめる。

【表５】 学校教育法が定める学校教育の３要素等一覧

学校教育法が定める 学校教育の３要素	新学習指導要領で示された育成すべき資質・能力の三つの柱・３観点	観点別学習状況の評価の３観点
基礎的な知識及び技能の習得	知識及び技能が習得されるようにすること。	知識・技能
課題解決に必要な思考力・判断力・表現力	思考力・判断力・表現力を育成すること。	思考・判断・表現
主体的に学習に取り組む態度	学びに向かう力、人間性等を涵養すること。	主体的に学習に取り組む態度

前沢明峰支援学校実践研究部（2020）：実践研究部通信 No. 15 より引用

また、岩手大学大学院教育学研究科の佐々木全准教授からこれまでにいただいた指導助言の中から、特に以下の点を研究活動に取り入れる。

- ①「できる状況づくり」の具体的内容を探索、構想するための視点として「ヒト（伝達と共感）」「モノ（道具と場の設定）」「コト（活動内容と展開）」の３観点で整理する。

※「できる状況づくり」とは、「自立的・主体的生活を実現するために一人ひとりに最適な支援的対応をしていくこと」を指し、「精いっぱい取り組める状況」と、「首尾よく成し遂げられる状況」と定義される。(名古屋、2019)

② 手立てについては「事前」「事中」「事後」の時系列における観点で評価する。

③「支援の手立て」はその意図が分かりやすいように「〇〇できるように、□□する」等のように記述する。

④「できる状況づくり」の評価は「児童生徒の学習状況」が「児童生徒の姿」と「支援の手立て」との関連で記述する。

【例】 教師が床に付したラインを指差し「ほら」と声をかけると、それに気がついて脱いだ靴を所定の位置に置き直すことができた。

⑤ 評価の記録については、例えば「自主的・自立的に行動したとき」→○、「注意喚起を要したとき」→□、「行動の指示を要したとき」→△、等のような分かりやすい方法を取る。

「行動したとき」→○、「注意喚起を要したとき」→□、「行動の指示を要したとき」→△、等のようにすると分かりやすい。

3 職員の研修について

(1) 岩手県高等学校教育研究会（高教研）特別支援教育部会講演会について

夏季休業中に標記講演会の開催を予定している。授業づくりに関する内容で講師を招聘し、講演会を行う。

(2) 実践研究部通信の発行（不定期）

VII 研究の実際

1 研究の基本構想と共通理解について

(1) 第1回全体研究会

5月26日に第1回の全体研究会を実施し、研究会後に研究会の内容及び資料などについてアンケート調査を行った。当日参加した職員51名、当日参加できなかった職員を含め64名から回答を得た。その中から、質問3「今回の研究会の発表内容及び配付資料の内容はわかりやすいものでしたか」に対する回答のまとめを【表6】に示す。

【表6】第1回全体研究会アンケート「発表内容及び資料は分かりやすかったか」への回答

よくわかった	だいたいわかった	少しわかりにくかった	わかりにくかった	参加できなかった
18名	32名	1名	0名	13名
35.2%	62.7%	1.9%	0.0%	

研究会に参加できた 51 名の職員のうち 50 名（97.9%）から肯定的な回答（よくわかった、だいたいわかった）を得た。また同じアンケートの自由記述においても「テーマが学校教育法、学習指導要領、学校教育目標から導き出されたという説明は、とても分かりやすかった」「昨年の研究をさらに深められ、学校教育目標にも合致するものでよい内容だと思った」「各学部それぞれの課題にせまるテーマ設定をしているのが面白く、これを学校の研究としてどうまとめていくのかが興味深く感じた」などの回答があり、全体研究及び各学部・寄宿舍の研究についての共通理解は得られたと考える。

一方で、「資料の中で使っている言葉の吟味が必要なところがあるように感じた」、「『生涯にわたって〜』のテーマは、本校の児童生徒のどのような姿から導き出されたのかという、児童生徒の姿とテーマのつながりが明確に示されるとよいのではないかと感じた」というご意見もいただいた。今後の研究会をより有意義なものにしていくための、貴重な提言として受け止めたい。

（２）第２回全体研究会

全体研究及び各学部、寄宿舍の研究について、中間まとめの報告を行い、その内容について協議、意見交換を行う。また、助言者として岩手大学大学院教育研究学科佐々木全准教授を招聘し、研究内容に関する助言をいただく。

２ 全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舍の研究計画の作成と推進

各学部、寄宿舍研究の中間まとめの報告による。

３ 授業実践と PDCA サイクルによる授業改善の取組

（１）授業研究会の開催

年度初めの計画に沿って、各学部 1 回の授業提案による授業研究会を実施した。授業研究会ごとに協議の柱を設定し、8～10 人程度のグループごとに協議の柱に沿って成果や課題を出し合い、模造紙にまとめた。概要を【表 7】に示す。

【表 7】令和 5 年度授業研究会の概要

	研究会期日	内容・対象	単元名	参加者数
第 1 回 中学部提案	7 月 7 日 (金)	国語 中 1 学年	ペンギンショーを見に行こう	35 名
第 2 回 小学部提案	9 月 21 日 (木)	算数 小 6 学年	ものをくらべよう	39 名
第 3 回 高等部提案	11 月 17 日 (金)	作業学習 木工班	マル満工房納品に向けて製品を製作しよう	41 名

（２）授業研究会まとめ資料の作成

それぞれの研究会において協議された内容と助言をまとめた資料を作成し、校内ネットワークを通じて職員に配信した。その内容については各学部の研究に関わる貴重な資料として活用している。

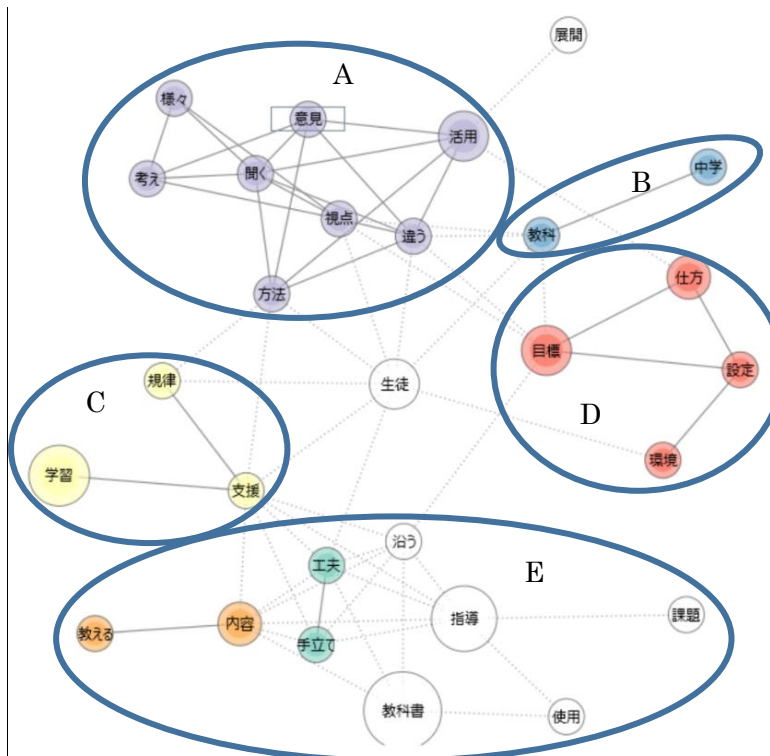
（３）授業研究会におけるアンケートの実施

各授業研究会終了後、参加者を対象にアンケートを実施した。主な質問は①グループ協議が活発に行われていたか、②授業の成果と課題は明確になっていたか、③協議された内容が自身の今後の実践に役立つと思うかの３点だったが、ここでは授業研究会が参加者各自の学びにつながったかどうかという観点から、質問③「協議された内容が自身の今後の実践に役立つと思うか」の結果を【表８】に示す。

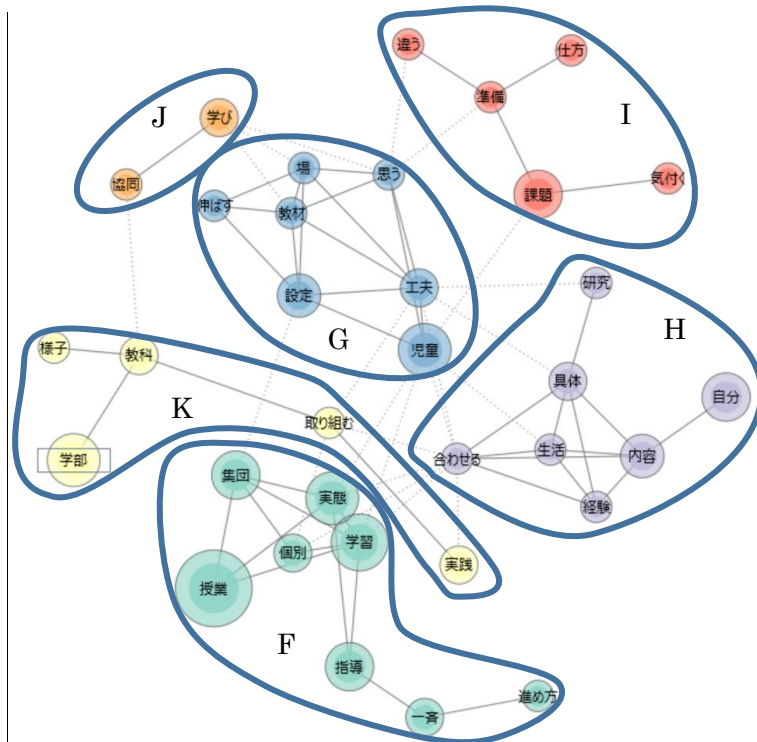
これらの肯定的回答（「そう思う」「だいたいそう思う」）について、具体的内容の記述を求めた質問では、授業参観及び授業研究会を通して参加者が学んだこと、参考になったことなど、様々な観点から多くの記述がみられた。ここからテキストマイニングにより複数記載のあったキーワードを抽出して、授業研究会ごとに共起ネットワーク図（【図１】～【図３】）を作成した（テキストマイニングの方法については巻末に記載）。それぞれの共起ネットワーク図に作られたグループを基に、参加者の記述を参照しながら主な内容をまとめた。いずれの授業研究会においても、各授業の特質や協議の柱に沿った具体的な学びが得ることができた。

【表８】 質問③「今回の授業研究会で協議された内容などが、自身の今後の実践に役立つか」との回答（（ ）内は回答者数）

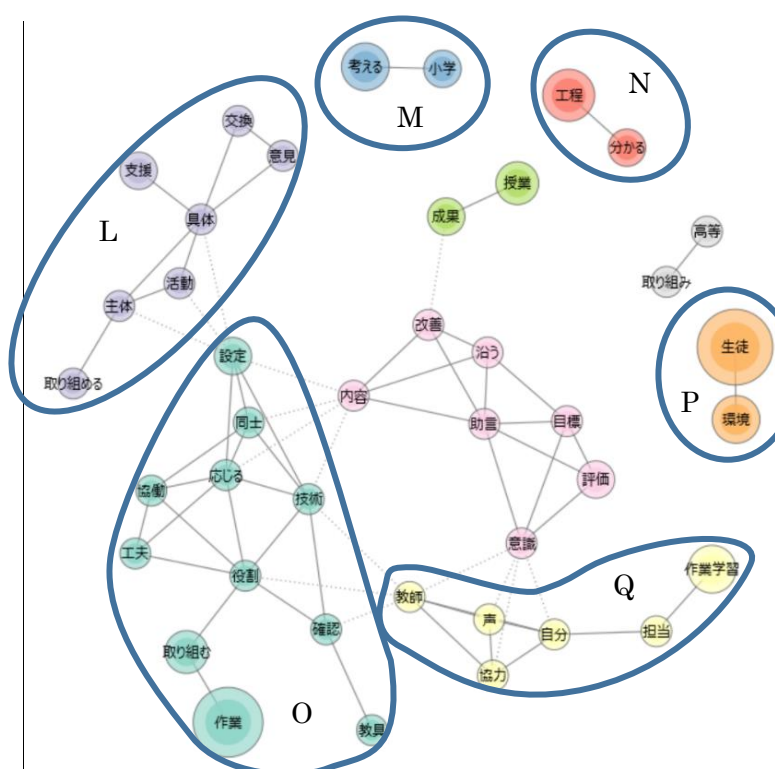
	そう思う	だいたいそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
第１回 (28名)	16名	12名	0名	0名
第２回 (33名)	24名	9名	0名	0名
第３回 (35名)	16名	18名	1名	0名



【図1】第1回授業研究会の共起ネットワーク図



【図2】第2回授業研究会の共起ネットワーク図



【図3】第3回授業研究会の共起ネットワーク図

第3回授業研究会（高等部、作業学習）

L 生徒の主体的な活動への具体的な支援

M 小学部（他学部）でできること、共通するところを考える機会

N 分かりやすい作業工程、工程表の工夫

O 生徒の実態・技術に応じた作業内容の設定などの工夫、役割を分担し、各自の役割にしっかり取り組むことで、協働作業になる実践、教材・教具、治具

P 環境整備（生徒が一人でできる環境、生徒の目標に沿った環境）

Q 教師の立ち位置、声の掛け方、協力する意識の育て方

※具体的に学んだこと、参考になったことが見出せなかったグループは囲んでいない。

4 職員の研修について

岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会講演会の開催

以下のとおり、岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会講演会を開催した。

- （1）日 時 令和5年8月2日（水）9：45～11：55
- （2）場 所 前沢明峰支援学校 多目的ホール（オンラインでの配信も実施）
- （3）講 師 有川宏幸氏（新潟大学教育学部 教育科学講座 教授）
- （4）演 題 「生涯にわたって学び、成長しようとする力を高める授業実践・指導実践
困った行動には理由（わけ）がある ～応用行動分析学にみる子どもの行動～」
- （5）参加者 本校教職員、他校教職員（参加65名）

Ⅷ 研究のまとめ（2年次研究における1年次の中間まとめ）

今年度は2年次研究の1年次ということで、前次の研究テーマの成果と課題を参考にしながら本次研究の基本的な構想づくりと共通理解の促進を行い、全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舎の研究計画の作成と推進を中心に行った。各学部、寄宿舎においては、各々の特色や課題を綿密に検討し、具体的なサブテーマに沿って計画的に研究を進めることができた。また、研究活動の中心ともいえる授業実践とPDCAサイクルによる授業改善の取組においては、3回実施された授業研究会にて活

発な意見交換が行われ、それぞれの学部や授業の特徴、様々な手立てや環境設定の工夫などじっくりと学ぶことができた。

課題として、全体研究テーマに掲げる「生涯にわたって学び、成長しようとする力」の定義付けが曖昧であり、職員間で共通するイメージをもちにくかったことが挙げられる。育成を目指す資質・能力の三つの柱の一つである「学びに向かう力、人間性等」の涵養を通して「生涯にわたって学び、成長しようとする力」の育成にも深く関わってくると考えているが、今回「生涯にわたって学び、成長しようとする力」を、「粘り強い取組を行おうとする側面と、自らの学習を調整しようとする側面から見た主体的に学習に取り組む態度」と定義した。今後、職員間で共通理解を進める中で、全体テーマに対する具体的なイメージをもちやすくしていきたい。

上記に関連して、今年度は全体研究テーマを具体的に意識し、追求する場面が少なかったという懸念もある。次年度はより具体的に「生涯にわたって学び、成長しようとする力を高める授業実践・指導実践」という全体研究テーマにせまる研究を推進していきたい。

【補足】テキストマイニングを用いた記述内容の分析について

アンケートの記述内容をまとめる補助ツールとして、「テキストマイニング」という手法を用いながら検討した。大まかな手順は以下のとおり実施した。

①記述内容をデータ入力する。

※ 入力の過程で明らかな誤字や助詞の誤用は修正し、表記を漢字またはひらがなに統一した。

※ 同様の内容（意味）を表す語の表記は統一した。【例】子ども → 生徒 など

②テキストマイニングソフト「Kh_coder」を使用し、①のデータを基に抽出語リストを作成する。

③抽出語リスト（複数回記述のあったキーワードを対象）からそれぞれの単語の関連を表す「共起ネットワーク図」を作成する。

④共起ネットワーク図から、関係性が強いと思われる語（キーワード）のグループを作成する。

⑤グループ化されたキーワードを参考に、実際の記述内容と見比べながら、共通する内容を数点にまとめる。

【参考・引用文献】

- （１）文部科学省：特別支援学校学習指導要領解説（総則編）、2018
- （２）文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター：学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編）、2019
- （３）宮城県総合教育センター：知的障害教育のためのみやぎ授業づくりガイド、2021
- （４）新井英靖：特別支援学校新学習指導要領を読み解く「各教科」「自立活動」の授業づくり 明治図書、2019
- （５）前沢明峰支援学校実践研究部：実践研究部通信 No. 15、2020
- （６）前沢明峰支援学校：研究集録 明峰の実践第 20 号、2022
- （７）名古屋恒彦：「各教科等を合わせた指導」エッセンシャルブック ジアース教育新社、2019
- （８）末吉美喜：テキストマイニング入門 オーム社、2019